

江戸の大火に襲われたオランダ商館長ワーヘナールの手紙から伝わるもの —明暦の大火の混乱と日本人の強い責任感

フレデリック・クレインス

■ なぜオランダに明暦の大火の記録があるのか

1657年3月2日、毎年の慣例に従って将軍に謁見するために江戸に滞在していたオランダ商館長ザハリアス・ワーヘナールは、明暦の大火に遭遇した。現存するワーヘナールの日記に、炎の猛威から逃げ惑う体験が克明に記録されている。また、ワーヘナールによる明暦の大火についての記録は日記のほかに2通の手紙にもある。

この2通の手紙は日記と同様にオランダのハーグ国立文書館に保管されている。なぜ、明暦の大火の記録がオランダの国立文書館に現存しているのか。その経緯について少し説明する。オランダ東インド会社は1609年に平戸でオランダ商館を設立した。商館は1641年に長崎の出島に移転し、幕末まで西洋人と日本人の交易の場として機能した。

商館では大量の文書が作成された。貿易関係の文書が主であったが、歴代の商館長が毎日付けていた日記や送受信の手紙も数多く残っている。これらの文書は出島で保管されていた。やがて、幕末になると、文書は一括してオランダのハーグ国立文書館に移管され、オランダ東インド会社のそのほかの文書と一緒に現在に伝わる。

日記は1年分ごとに冊子にまとめられていた。また、受信した手紙の写しと送信した手紙の控えも1年分ごとに冊子に綴じられていた。下の写真は、筆者がハーグ国立文書館でオランダ東インド会社文書のうちの2冊の冊子を調査した時のものである。



ハーグ国立文書館でオランダ商館文書を調査する筆者（撮影＝シンティア・フィアレ氏）

オランダ東インド会社文書の冊子の多くは写真にみられるものと同じような形態である。数十頁から成る薄い冊子もあれば、2000頁以上に上る分厚い冊子もある。ハーグ国立文書館に保管されている、これらのオランダ東インド会社の冊子を並べると、1200メートルもの長さになるという。

■ 出島による隔離が文書を守った

このように圧倒的な分量を誇るオランダ東インド会社文書の中に、平戸と長崎のオランダ商館の文書が含まれている。この平戸と長崎商館の文書はほとんど完全な状態で現存している。なぜだろうか。

長崎オランダ商館は、年に一度しかオランダ船が来航しない人工島（出島）にあった。また、この島への人々の出入りは長崎奉行によって厳しく管理されていた。このように隔離された場所に商館があったからこそ、文書の散失を免れたのだろう。

まして、文書は後任の商館長のための参考用としても大切に保管されていた。より参照しやすいように、各冊に目次や欄外索引までも付与されていた。商館文書はそれだけ頻繁に参照され、活用されていた。

このような整備された文書管理システムのおかげで、たまたま江戸で明暦の大火に遭遇した商館長ワーヘナールの日記や手紙も長崎オランダ商館で永らく大事に保管された後、ハーグ国立図書館に辿り着いた。

■ ワーヘナールの2通の手紙



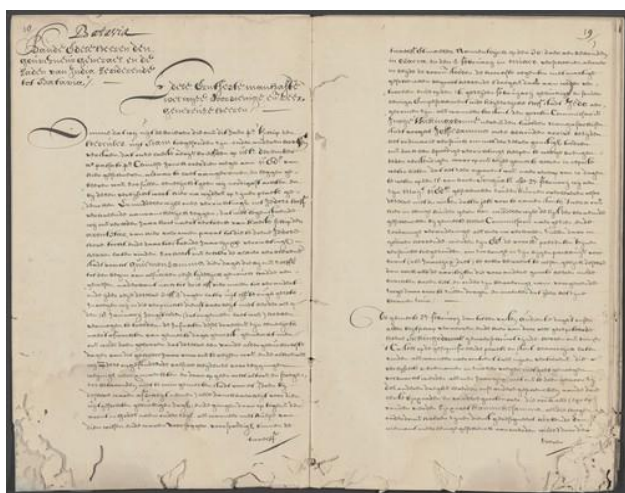
長崎オランダ商館の1657年付送受信書簡の表紙（ハーグ国立文書館所蔵）

筆者はこれまでワーヘナールに興味があって、彼の日記を中心に明暦の大火などについて調査・分析を行ってきた。日記にはワーヘナールの経験したことや見聞したことがきわめて詳細に記録されているからである。

以前から、明暦の大火について書かれたワーヘナールの手紙の存在についても知ってはいた。一刻も早く読みたいと思っていた。なぜなら、日記は、その日その日の出来事を羅列的に記述する傾向があるのに対して、手紙では、最も印象に残ったことを伝える傾向があるからである。大変な経験をしたワーヘナールが明暦の大火をどのように振り返って、手紙の受取人に伝えたのかを知りたかった。

オランダ商館関係の主要な文書についてはスキャンデータを手元に置いているので、いつでも見ることができる。しかし、このところずっと、さまざまな締め切りに追われて、

スキャンデータの中から



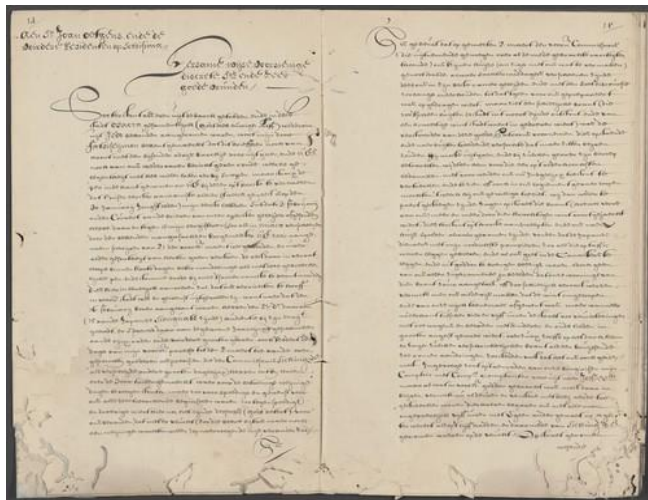
ワーヘナールによる総督宛書簡、長崎、1657年10月12日の冒頭部分（ハーグ国立文書館所蔵）

を終える毎年の秋に、総督宛に出す1年分の商館活動の報告書として書かれている。約20頁から成るこの手紙には、明暦の大火のことが極めて詳細に記述されている。

明暦の大火に関して手紙と日記で記されている内容を比較すると、両方とも報告書としての性格が強いかからか、概ね同じものになっていることが判明した。とはいえ、日記にはない、いくつかの興味深い記述も見つけた。これについては後述する。

■ 大阪から長崎へ送った、もう1つの手紙

次に、もう1通の手紙に目を向けた。後付け部分によると、この手紙は1657年3月23日に大坂で書かれたものである。明暦の大火が発生した2週間後のことである。



ワーヘナールによる長崎オランダ商館員ウットヘンス宛書簡、大坂、1657年3月27日(1) (ハーグ国立文書館所蔵)

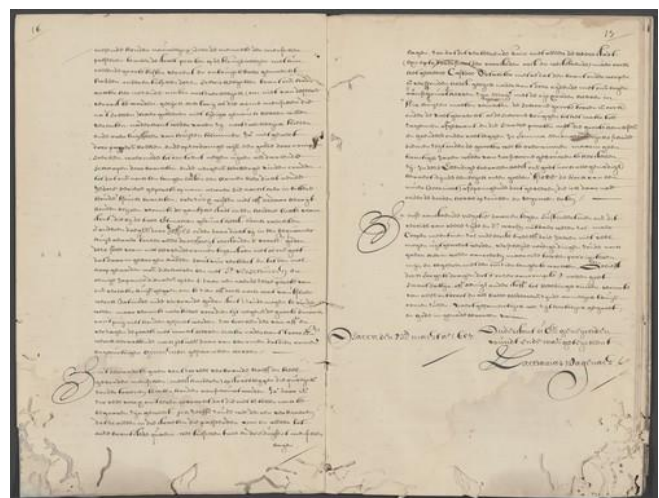
日記の方で、この時期に記された情報を確認すると、ワーヘナールは明暦の大火が起こった6日後の1657年3月9日に江戸を去り、東海道を沿って西に向かった。大坂に到着したのは、3月23日の午後だった。

宿に着いたところでワーヘナールは、長崎の商人が大坂にいて、その日の夕方に長崎に向けて出立する予定だと通詞・名村八左衛門から聞き知った。これを受けてワーヘナールは、江戸での体験を伝えるために大急ぎで長崎オランダ商館で留守を預かっている商務員ウットヘンスおよびほかの商館員たち宛に手紙を書いて、その長崎の商人に託した。

このことは日記の3月23日条に記録されている。先ほどの大坂から出された手紙の日付と一致している。したがって、日記の方で急いで書いたと言及されている手紙は、ハーグ国立文書館に現存している手紙のことだと判明する。

■ 大坂から発した手紙はどのような内容だったのか

早速、手紙の内容を確認してみた。ワーヘナールはまず大火前の江戸での出来事について簡単に報告している。2月16日に江戸に到着し、27日に若き将軍・家綱への謁見が実現した。幕府高官との関係も良好で、余分に持参していた贈物の販売で3000銀両(約6000万円)を稼いだというような内容である。



ワーヘナールによる長崎オランダ商館員ヨアン・ウットヘンス宛書簡、大坂、1657年3月27日(2) (ハーグ国立文書館所蔵)

「しかし、幸運が我々にほほえみかけてくれた出だしが我々にとって順調で有望だっただけに、不幸で悲しい結末になった」とワーヘナールは綴っている。

次にワーヘナールは明暦の大火での経験談に移る。大目付井上政重の屋敷に招待されていたオランダ人は、大目付と楽しく談話していた。料理も運ばれて来たところ、江戸の北側に恐ろしい火事が発生し、炎は強い北風で街の中心に向かって押し進んでいた。

大目付は消火活動の責務を果たすためにその場から離れたが、オランダ人には屋敷に居残るようにと伝えた。しかし、ワーヘナールたちは定宿の長崎屋に戻る決心をした。許可を得た上で、屋敷の外に出た。

大目付の屋敷の前で馬に乗ったところ、炎が強い風によって迫って来るのが見えたので、ワーヘナールたちは馬に鞭をあてて、急ぎ宿に向かった。

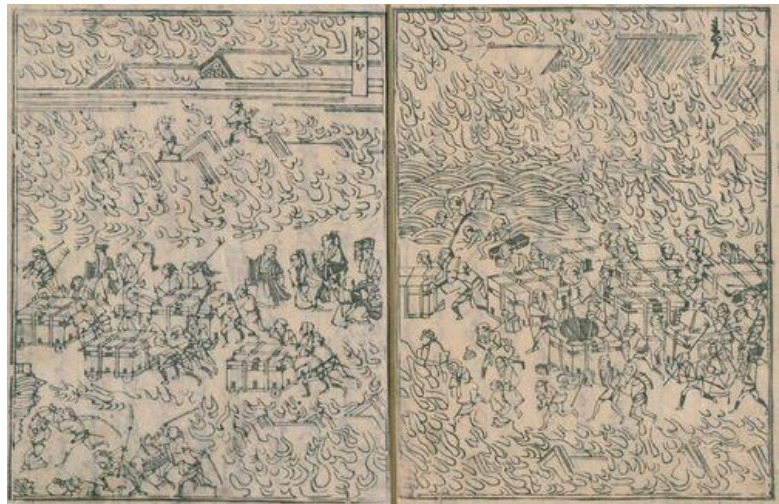
宿に戻ったところ、日本人の使用人たちは、オランダ人の荷物を土蔵に運んでいるところだった。ただ、その時点での火事の状況からは、オランダ人の宿が炎の餌食になるとはワーヘナールたちにはまったく想像できなかったという。

■ 迫りくる炎、あふれる避難民

しかし、午後4時と5時の間にワーヘナールは不穏な光景を目の当たりにする。手紙ではその光景を次のように記述している。「通りは避難民であふれていた。荷車が多く、その上に子供や老人が乗っていた」。

ここで言及されている「荷車」とは「車長持」のことである。長方形の木箱の底部に車輪が付いていて、避難時に荷物を入れて持ち出せる便利なものだった。荷物だけでなく、子供や老人もその上に乗せていたということがワーヘナールの手紙から分かる。

この光景を見たワーヘナールは、火事の全体像を掴むために定宿の屋根に登って、江戸の街を見渡した。ワーヘナールがそこで見た光景は「押し寄せて来る泡立つ炎の海」だった。ワーヘナールは、現金の入っている書篋筒を長崎奉行の屋敷に届けてもらうために長崎奉行所の役人に託し、自らは、「嘉右衛門」という役人頭と共に逃げることにした。



車長持を押して逃げる避難民たち（『むさしあぶみ』国立国会図書館所蔵）

■ 江戸の混乱

ところが、ワーヘナール一行が出た通りは、多くの避難民の群衆が押し寄せ、まったく進めなかった。問題は、治安のために設置されていた各通りの木戸が閉鎖されていたことと、通りが

車長持で塞がっていたことであつた。刻々と近づいてくる炎を避けながら、必死になって、屋根によじ登ったり、寺院の竹垣を潰したりして、なんとか命を取り留めたとワーヘナールは感情に訴えかける調子で語っている。

この避難について、日記には記されていない内容が前述の 10 月 12 日付の総督宛の手紙に記述されている。その内容は、次の通りである。

「恐怖に怯える哀れな難民でいっぱいの狭い通りは使えなかつた。なぜなら、その通りは木戸や（彼ら〔日本人〕がこのような危機の時に家財を入れて運ぶ）荷車であまりにも混雑していたので、誰も出入りすることができなくなつた。そして、これらの哀れな人々の目の前に恐ろしい炎が迫ってきたのに、彼らはそこに留まっていた。彼らは早々と自分の家財から離れるくらいなら焼死する方を選んでるようにみえた。しかし、我々は生身以外何も携帯していないし、猛威を振るう炎に追いつかれ、取り囲まれるのが目に見えていたので、最終的にそれらの荷車の上、そしてさらに人間の上をよじ登って進んだ」。

このワーヘナールの記述は、通りでの混雑やオランダ人の必死さを克明に伝えている。

■ 江戸の惨状

他方、ウットヘンスに宛てた 3 月 23 日付の方の手紙によると、大火が終わった後、ワーヘナールは、くすぶる瓦礫の中を抜けて、焼失した定宿に向かった。途中、散乱している数多くの焼死体に遭遇した。多くは子供の死体だった。これらの焼死体を見て、涙を止められなかつたとワーヘナールは手紙に綴っている。

また、こちらの手紙の方では、江戸城の焼失についても詳細に書かれている。特に「華麗な天守閣」や「華麗な橋」、「重い門」がすべて倒壊していたことは印象に残つたようである。また、将軍・家綱が三ノ丸の「茶屋」に逃げ込んだことも特筆している。

ワーヘナールは、オランダ人に同行していた料理人・長兵衛が炎から逃れようと城壁の上から飛び降りて死んだことにも言及している。長兵衛の遺体を探させ、埋葬したことも付け加えている。

ワーヘナールは手紙の最後に長崎に戻るまでにウールの衣服を用意しておいてくれるようにとウットヘンスに依頼している。それは、火事に巻き込まれた時に薄い服しか着ておらず、冬用の服が全部焼けてしまったからであつた。以上が 3 月 23 日の手紙の概要である。

■ 役人への感謝

全部で 4 頁にまとめられた避難経験の中で、長崎で留守を預かっていた商館員にワーヘナールがまず伝えたかったことは、江戸の混乱、危機一髪の脱出、大火後の江戸の悲惨な姿、そして仲間であつた長兵衛の死であつたように思える。

ところで、もう一方のオランダ東インド会社総督に宛てた 10 月 12 日付の手紙を読んだ時に、気になる記述があつた。そこにも長兵衛の死のことが書かれていた。「料理人でありながら、時々通訳もやり、非常に能力が高く、有用な人材だった」と長兵衛を褒め称え、彼の死を大きな損失として嘆いている。

そして、自分たちも長兵衛と同じ運命を辿るはずだったとワーヘナールは続ける。助かったのは奇跡であり、役人たちと通詞たちのお陰であったという。ワーヘナールはさらに次のように記している。「役人たちと通詞たちの助けによって、前述のような普通でない方法で逃げ道を探し、力づくで突破した。そうでなければ、我々は前述の哀れな避難民と共に通りに立ち止まったまま、確実に死んだだろう」。

この文章からは、屋根を登るなど道なき道を通して、オランダ人の避難を先導したのが、同行していた長崎奉行所の役人たちだったことが分かる。役人頭の嘉右衛門が「とても気さくで慎重な人」であるとワーヘナールは書いている。ワーヘナールの命が助かったのは、この役人頭のおかげだった。

同じ手紙の別の箇所でも、日本人が自身の命を顧みず一晩中ワーヘナールの現金の入った書篋を守りながら街を逃げ回ったと書かれている。書篋は次の日に無事にワーヘナールの手元に届けられた。職務に対する日本人特有の責任感の強さが表れている。

以上のように、日本人の役人は自分の身をもって、ワーヘナールとその財産を守った。我々が今ワーヘナールの日記を読むことができるのは、この無名の長崎奉行所役人のおかげである。

* クレインス桂子は本稿を校閲し、読みやすいものにしてくれた。ここに厚く感謝を申し上げます。

フレデリック・クレインス「江戸の大火に襲われたオランダ商館長ワーヘナールの手紙から伝わるもの—明暦の大火の混乱と日本人の強い責任感」（講談社現代新書 ウェブマガジン、2020年1月29日掲載）。